

# ナルスイス、イヤゴ 比較論

百 岡 胤 正

Narcisse Comparé à Iago

TANEMASA MOMOOKA

## 序

J. Racine は *Andromaque* の次に喜劇の “*Les Plaideurs*” を出しておるので順序とすれば此の作品を取扱えばよいのであるが、筆者は、この喜劇を除いて第三の傑作の悲劇 *Britannicus* を取扱うとするものである。それは、この喜劇作品の取扱は彼の最後の悲劇作品である *Athalie* 迄取扱つてからのことにし度いと考えておる。彼の悲劇作品の中には到る処喜劇的要素が豊富にあつて、非常に面白いと思われるので之等に就いてはこの喜劇を取扱う時か、或はそれ以後にし度い。

Racine の作品は仏蘭西ではよく研究し尽されておるといふが、さればといつて、東洋のしかも浅学菲才の者が論じて屋上にまた屋を架することもあるまいとの言も成り立たない筈で、殊に沙翁の作品と比較したらまた妙であると思うが、之等両者の比較もよく論ぜられておるといふが、英仏の此の二大詩人の作品が理屈無しに好きであるから読みもし、研究もしてみたいのであるからよろしく御了承を願うこととする。

此の作品は五幕より成つておる。登場人物としては Néron 皇帝、其の実母 Agrippine、正統の皇位継承者であつたが Agrippine に廃された Britannicus と恋人の Junie。Britannicus の師ふ Narcisse Néron の師ふで厳格な軍人の Burrhus。Agrippine の腹心の女。場所はローマの皇帝の宮殿内である。

## 梗概

Agrippine は、自分の腹を痛めた Néron を無理に皇位に登らせたのも自分の権勢力を隆盛にしようという意志に他なかつたのであるが、近頃漸く、Néron の権力の強まるのをみて心は平静を失つてをつた。Britannicus と Junie とは相愛の仲なので女皇は、二人を助けようとするが、Néron は Néron で Junie を恋しておるので Britannicus で邪魔で仕方が無い。Narcisse は、自分の幸福のみを考慮して Britannicus を裏切り Néron の腹心の者となる。Burrhus は Narcisse と正反対の行方を示す。Agrippine は Néron と Britannicus とを和解させようと説ききかせる。併し、Narcisse の誘惑の魔の手が強く Néron を引き、遂に Britannicus は宴会で毒殺される。Narcisse も怒れる人々の為めに殺される。斯うして Agrippine と Néron との対抗が一層はげしくなる。

此の作品の中で Néron と Agrippine とは見事に描かれておるといふことは諸家の説く所である、けれども、拙稿ではそれにはふれないで先に Narcisse を記して、後の比較論で、沙翁の *Othello* の Iago を——特に三幕三場中の——論じて、両者の比較に及んだのである。それというのも、自分は、先にアンドレモーロアの英国史中の言葉に動かされたからである。Racine は、ローマの宮中を沙翁その他よりもよく知尽して描いてをるといふ。斯ういう政治的陰謀的な作品を以て先輩 Corneille に直接対抗しようとしたのであるが、果して其の真価も次第に認められて、一昨年わが国

1. アンドレモーロア 英国史上第四篇第五章教会分離と迫害、水野成夫・小林正嗣氏共訳

でも上演されて好評を得たことはよく知られておる。

Narcisse. seul.

La fortune t'appelle une seconde fois,  
Narcisse; voudrais-tu résister à sa voix ?  
Suivons jusques au bout ses ordres favorables;  
Et, pour nous rendre heureux, perdons les misérables.<sup>1)</sup>

訳 ナルスイスよ、運命の女神がまたもお前を呼んでるぞ。それでも、其の声がいやだというのか。イヤ、甘い其の仰せにどこ迄も、ついていこう。知れたことさ。俺達の仕合せの爲めにさ。それに、惨めな奴等はくたばつてしまえさ。

Narcisse は、己の教え子 Britannicus を裏切り、Néron 皇帝の意を迎えようと汲々としておつたが、Britannicus にも失恋の憂目を見させようとの皇帝の相談を受けた後、独り居の彼は上述の白を以て本心を明かにする。

Mais je mettrai ma joie à le désespérer

訳 いわずもがな、あいつを失望のどん底にたたき落してやるのも楽しみじやて、Néron は斯く Narcisse にいつておる。

此の二人の本心は、他人の不幸を己の喜びとする悪魔的な精神である。Macbeth の初めに出る three witches は、凱旋將軍のマクベス等の屍途に待ち受けて、相談し散ずるに及びいつた白は、

Fair is foul, and foul is fair;<sup>1)</sup>

人間共の美は俺達の醜、俺達の醜悪は、人間共の美さ。

Milton の Paradise Lost に於て天上より墮された Satan は、

All good to me is lost;

Evil, be thou my good;<sup>2)</sup>

訳 善事は、我に於てすべて之雲消霧散す。悪よ、汝よろしく我の善たれ。

three witches, Satan の精神は、Narcisse, Néron のそれと何等異なる所が無い。ローマの史家 Tacitus (約55-120) の Annals 及び其の他により Racine は山の作品をつくつてをるが、此の年代記に出てくる実在の人物 Narcisse に就いて述べてみる。<sup>3)</sup>「既に Appius 死を計画してをる。それに、Caius Caesar の殺害事件に関係した Callistus 及び Pallas と共に、皇帝 Claudius の寵姫 Messalina を秘かに脅迫して、其の情人 Silius に対する情を転向せしめることの可否を論ずるのであつた。此の計画は、途中で破棄されたが、Narcisse を含む三人の陰謀家は権勢に対する欲望をすてたのではなく、殊に Narcisse は、虎視眈々として、機会を狙ひ、皇帝の二人の妾を口説き、正妻の失脚による権力の増大を約し、贈物等で二人を籠落して、之を内通者として仕上げた。此の点に於ても Narcisse は他の二人に断然ぬきんでをる。皇帝の妾 Messalina が情人 Silius と結婚したことを皇帝に訴える者あつて、之に立ちあつた Narcisse は之を予め承知しておるが、それを隠しておつたことの許しを乞い、両人の結婚の無効を皇帝に決定させ、Messalina をとり戻させようとした。それに Silius が新皇帝になるおそれありと皇帝に警告する。Messalina は Silius と共に快樂の場にあつた所を皇帝の軍に襲われ、Silius と Messalina とは身を以て逃れる。一方 Claudius も皇位の不安を覚え、恐怖にとらわれて、特に、Silius 等に復讐するよりも、自分の部下の軍の確保を信頼するに Affranchi に託すことをすゝめられる。Narcisse は、この手段こそ帝の唯一の安全

1) Britannicus 二幕八場 757—7601

1) Macbeth, I. i.

2) Milton's Paradise Lost, IV. ii. 108—110

3) Tacitus の年代記の XI. 29~38. XII. 57~65.

策なことをいい、自分で其の役を買つて出る。Narcisseは、皇帝の車の座席を占めて、ローマに入城する。皇帝は、Messalinaの不貞を責めるも、一方に於ては、彼女と其の子に対する情愛を思ひ矛盾したことをわめきさげふ折しも、彼女の邪悪と大胆を責める者あつてか Narcisseの必死の説得も及ばず、Messalinaは皇帝の面前に引き出され、己の訴へをきくことを力説する。此の際、皇帝の眼を妃から外らせようとして、Narcisseは、Messalinaの不行跡を詳細に記した紙片を皇帝に手渡しする。NarcisseはMessalinaの子供 Britannicusと Octavieとを他へ移したので、兩人は、ローマに姿を現わさなくてすんだ。人妻は、弁明も求められずに、死を命ぜられる筈はないという訴あり、Messalinaも自分に対する訴の反証をあげなければならぬといい、この辺を Narcisseはとりなして、皇帝の沈黙のまゝ、諸事を掌中におさめる。Narcisseの命令で Siliusの家宅捜査がはじまり、皇帝も赴く。事あつて集合する軍団の前に、皇帝は Narcisseに案内され、其の指図で、兵士に話そうとしても、ろくに発言も出来なかつた。やがて、Siliusは罪せられる。一方、Messalinaは、助命を願い、皇帝も、大分柔和となり、助命しようという気になる。之ではならぬと、Narcisseは、皇帝の趣旨であると称して、軍隊に命じ、Messalinaを殺そうとする。更に、人を送つて、事の成就を見とどけさせようとしたばかりか、先立つて、Messalinaの許に自らいく。Messalinaの死と共に競争者を圧して、Narcisseは quaestorshipに（検察官）昇進した。Messalinaの死後、皇妃問題が生じたが流石の Narcisseもこの点では失敗した。というのは推す所の候補者でなく、Pallasの推す Cermanicusの娘 Agrippineが選ばれる。此の妃こそ夫 Claudiusを殺し、実子 Néronと権勢を競い、其の欲望の為に、Britannicusの死を招いた其の人であつた。ローマの宮中の不倫に就いては種々考へさせられる。一方、之迄の Narcisseの行動をみるに機会ある毎に節を屈して権勢を欲し、パンのみで生きる人生を保持することにだけ心を砕いた哀れさを今更に思い、上記の白の裏書を明かに知る。

此の作品に現れる Narcisseは、上謁の人生感をもつて世に処してゆこうとする。以下、Narcisseが、劇の進行に如何に関係するかを述べる。因に Messalinaの遺子として Britannicusと Néronの妻 Octavieとがある。

Narcisseは、一幕三場で始めて顔を出す。Agrippineと Britannicusとが話す傍で、無言を守る。B.は恋人 Junieが宮廷に不法にも連れ去られたことを A.に訴え、其の同情を求める。A.は同意するが明からさまにこの場では話そうとしない。Narcisseは、之をきいて、当然裏切的気持が働き、悪逆の企画が識りなされたことであろう。B.は Narcisseに絶対の信頼感をもち疑わぬ、たゞ、A.だけは、或種の疑惑の感をもつてをる。先に、A.は、N.の私慾と官物私用の件で政撃しておるし、後日、N.は、A.に手痛く反対し、両者の間には深い溝を生じた<sup>1)</sup>。

#### 一幕四場

B.は、A.に果して依存してもよいかと、N.に意見をきく。A.は、B.の父 Claudiusの死を早めたことを B.は承知しておればこそ、きいたのである。よろしく力を共にすべきことをすゝめる N.の言には、何等偽りを含んでおらない。更に、B.は、己の位置は、皆人からみすられ、Néronは、己に対して疑わしい態度をとるので、お前の意見は如何にときかれて

Ah! quelle âme assez basse……

C'est à vous de choisir des confidants discrets,

Seigneur, et de ne pas prodiguer vos secrets.<sup>1)</sup>

訳 何と見下げ果てた人でしょうか……

思慮深い腹心をお選びなさるのは貴方様次第で、滅多に御自分の秘密をお減らしなさぬこと

1) Tacitusの年代記 57.65参照

1) 一幕三場 337—339行

も御務めの一つでございます。

実に真実の言であるだけ、滑稽感を抱かせる。Othello の旗手 Iago も

Divinity of hell!

When the devils will the blackest sins put on.

They do suggest at first with heavenly shows,

As I do now:<sup>2)</sup>

訳 悪魔の哲理<sup>3)</sup>

悪魔といふ奴は、一番真黒い罪の衣装を身にまとう時には、定まつて、初手には、有り難い神様めいたことを匂わせるもんだ、ホラ、丁度俺が今、斯うやつてる様にさ、

Iago は下卑な笑を浮べて斯ういつたろう。Narcisse は、初手どころか、凡そ Britannicus の命のある限りは、誠実そうに偽り通したのである。Molière の Tartuffe も、信心家らしく通そうと苦心する。

Laurent, serrez ma haine avec ma discipline,<sup>1)</sup>

訳 Laurent や、苦行帯も苦行シャツも締めてくれ、己の本心を見破つてる Dorine の姿を見て、斯ういつて取り繕ろう。こんな場合に Molière は Dorine に諷刺の言を見事に吐かせる。

Racine は諷刺の言を其の場では吐かしめないが、劇を統む者或は観る者の心の中に其の言を放たしめる。

二幕二場に入り、Narciss の 皇帝に対する態度が分明する。彼は、極力、皇帝を持ち上げる "Tout vous rit; la fortune obéit à vos vœux"<sup>2)</sup>

訳 「皇帝に笑顔を見せぬものが無い」「運命の女神こそ、皇帝の願望に從うのみ」等といつて、おだてるので、皇帝は Junie に恋しておることをいつてしまう。わが意を得たりと、Narcisse は、未だ悪の道に掛けては、自信の無い Néron、しかも、憶病らしく、弱気らしく見える Néron に恋敵として、Britannicus を認めさせる。B. は忍んで、Junie とあいびきすることを知らして、愈々 Néron の B. に対する嫉妬心の炎をかきたてる。次いで、Narcisse は、偉大な皇帝としての Néron、何人と雖も、其の威力に服し、其の一顧にでもあやかり度い者が多いことを説き、

Commandez q'on vous aime, et vous serez aimé.<sup>1)</sup>

訳 朕を愛せよと鶴の一声だけでその通りになります。

と迄いう。Racine はこんな白を諷刺しておるのが、声無き声として聞えて来る様な気がする。Néron ははそれでも、自信無げに、之迄の三年の善政、Agrippine, Burrhus 等、気がねすることばかりであるが、何をいうても 妃 Octavie に対しても厭気がさしてをる。一時でも早く勝手なことをし度い。この辺の Néron は、Antoine Adam<sup>2)</sup> の仏文学史にある如く、わがまゝな童子らしく、女々しく描かれておる。Racine が、この作品の Première Préface は述べておる様に、Néron は正に un monstre naissant の態である。斯うした Néron に、Narcisse は、一層切に、Octavie を離縁すべきことをすすめる。こんな時、離縁もなし得ないのは、わが君ばかりだといわれても、Néron にしてみれば、母の Agrippine の眼が恐しい。

Vivez, régné pour vous: c'est trop régner pour elle.<sup>1)</sup>

御身体も御政治も、御身の為め、之では、母後の為めの御政治というもの Narcisse は尙も皇帝に

2) Othello, II. iii. 355—358

3) 研究社版 Othello の市河三喜先生の訳を拝借

1) Molière: Tartuffe, III. ii. 853行

2) Britannicus II. ii. 381行

1) Acte II, Scène II, 458行

2) Antoine Adam の仏之学史 358, 359頁参照

1) Britannicus の II. ii. 492行

元気をつける。皇帝は、緞來の Agrippine の煩しさを啣つ。それにしても、余りお前を(Narcisse) 押へておくのも、Britannicus へ何とやらといへば Narcisse は、何の、何の、B. は、私奴の忠義心に目も心も眩くれ果て、おります。あの小倅の命令とやらで、この私奴が、斯うしてこゝに侍べつておる次第でございます。B. を Junie から追払うことが肝要です。云々、の言を皇帝に進言する N. は正に裏切者の本性をあらわす。伊太利の詩人 Dante は「神曲」の地獄篇第卅四章に於て、Julius Caesar を同志と共に殺した Brutus をすら当然の罰として責苦にあつておるのを描いておる。ましていはむや、Brutus と比較するだに相応わしくもない倭人 N. が自分の主を裏切つた背徳行為は果して Dante の厳しい批判の眼を以てすれば如何なることになるのであろうか。基督を銀三十枚で敵に売つた Judas の行為にも等しいものがあろう。

## 二幕四場

Britannicus と J. とがあうことになる。皇帝は、B. の運命も御身次第。御身の会見の様子には、私の眼が光つてますぞと Junie にいう。こんな態度を皇帝にとらしめたのも Narcisse の指金に他ならぬ。若い恋人同志は、裏切者とも知らずして、Narcisse の眼前で話す。女は、Néron の眼が恐しい。Junie は相手に警戒させようとするが、B. としては、予め、恋敵 Néron が不在だと Narcisse より教わつておるので、気を許して女と語ろうとする。警戒おさおさ怠り無い女の態度をいぶかしみ乍らも、Agrippine も亦、わが同志であるという。J. としては、自分の態度如何が恋人の命にかゝることをきかされてをる以上、勸進帳を読み上げる弁慶程の芸にも及ばず、むざむざと、Narcisse の好餌となつたことはまことに口惜しいことである。されば、兩人の怪物は、自分達の打つた芝居が面白くなりそうに思われるので、冒頭に掲げた白を述べる。

## Macbeth

And make our faces vizards to our hearts.

Disguising what they are.<sup>1)</sup>

訳 面を本心の仮面とせよ、本心の本来の姿を詐りて。

Duncan 王殺害の後、Macbeth は夫人に対して、斯くいつて、本心を告白しておる。上記の各場面の Narcisse のしたり顔は、正に其の本心の姿の仮面であり、本心の本来の姿を N. の面は欺いておるのである。沙翁 The Comedy of Errors の三幕二場に同じ様なことがみられる。二組の双子の中の一組である Antipholus of Ephesus と Antipholus of Syracuse の兄の妻 Adriana の妹 Luciana が弟の Antipholus of Syracuse を 姉の夫と思ひ込み話しかける白の中に、

Bear a fair presence, though your heart be tainted;

Teach sin the carriage of a holy saint;<sup>1)</sup>

訳 起居ふるまひ美しく、心の汚れは兎も角も、罪の人にも聖人の姿をかれといはまほし、

Luciana は相手に種々話し掛けても、話が妙に通じない。Narcisse は何気ない顔をして汚れた心をおし隠しておる 裏切り行為も、B. や、J. の若い眼には、聖人らしき振舞とも見えるのである。Néron の心は、既に、罪惡の権化ともいうべき、Narcisse のものとなり、対照的な、徳の権化ともいう可き、Burrhus を離れてゆく。Néron の残虐性が頭をもたげ始める。三幕六場では B. は、Narcisse に、J. にあい度いという。更に、Britannicus は、N. の本心も知らぬまゝ、J. が不実にも、Néron に靡いておることを信じ込ませられる。若い恋人同志は、Narcisse の知らせで、Néron が現れるとも知らずに、やるせない思ひを語らう間に、皇帝が顔を出す。B. は捕えられる。Néron の母親に対する態度は強化して之を監視することになる。J. も同じ運命となる。

1) Macbeth, III. ii. 34.35 (Dover Wilson's)

正しい Burrhus は、Narcisse に敗北する。Agrippine は、Néron と B.との間に調停の勞をとる迄に説伏しようとしても、Néron の本心は、

*J'embrasse mon rival, mais c'est pour l'étouffer.*<sup>1)</sup>

訳 相手を抱いてやるとしても、息の根をとめる為に、  
という恐い心をもつてをる。Burrhus の必死諫言も Burrhus を愚弄扱いする帝の耳に入らばこそ、果して、四幕四場に於て、Narcisse は、毒殺の手筈を充分に整えてをることを帝に述べる。あれ程、師ふ B. に対して強い態度を示した Néron も、流石に、Narcisse の前では、役者の格が落ちる様に思われる。躊躇する様な態度の皇帝を無理に、Britannicus 毒殺にひきずり込むのである。切角、弱気を示した Néron も、Agrippine に高飛車に出られたとの Narcisse の言で、俄然色をなして気忙しく問ひ掛ける 自分のプライドを傷つけられたかの如くに。Néron は Narcisse を *tu toyer* して話して来る。二幕二場に於ては、N. は、下手から、柔和な態度で、除々に皇帝をもち上げ、皇帝としての自信をもたせ、持前の悪への道の第一歩を踏み出させむと、気を配りつゝおしすゝめる。然るに、此の四幕四場では、Narcisse は本来の悪い姿にかえり相手を強引に押し切るのである。Néron は泣声で訴えてるかの様にきこえる。Néron は、やはり悪虐の名を欲してはいない。

*Ils mettront ma vengeance au rang des parricides.*<sup>1)</sup>

訳 ローマ人は、俺の復讐も親族殺しとするだろう。

Narcisse は、之に答える。ローマの人民共の声に耳をかすには及びませぬ。そんなに気がねなすつたら御威勢にも何とやら。人間共が頭を下げるのは、自分達を鎖でつなぐ者にだけ。人民共は、何時にても、皇帝の御機嫌おかみがよくなることを願うてをります 皇帝には、毒殺が恐いことなんでしょうか。ローマは、犠牲者を祭壇に惜しみなく捧げるのです。たとえ、それが罪無き者でも、当然罪人となります。Néron は、斯る罪惡は、犯せない。Burrhus が恐い。と極力毒殺を避けようと努める。Narcisse は、御心に違背する輩は、勢を失いましょうし、皇帝は晴れ晴れとした御心持となられましょう心奮おどる輩も私共の如く膝を屈しましょう。云々といつて、Néron をおだてあげる。

第五幕六場にて、Burrhus は Britannicus 毒殺の場面を母後に語る。此の時に於て、Narcisse の性格が決定的にさらけ出される。

*Narcisse veut en vain affecter quelque ennui,*

*Et sa perfide joie éclate malgré lui.*<sup>1)</sup>

訳 ナルスイスは、憂はしげに面曇らすも空しきこと、思ほえず、ほゝゑむは背信のしるし、Britannicus の死んだ以上、Narcisse は誰にも遠慮は要らず、大手を振つて Néron えの忠誠振りを示す。哀れ、若い Britannicus は“*Et tu, Brute?*”といふ Caesar の如く、裏切者ありとも知らずして、命尽き果てしまう。

## 比較論

René Lalou は、Othello の旗手 Iago と Narcisse との比較論を試みてをる。「N. の方は、的確なる打撃をもつて Néron を攻めて、その虚栄心を傷つける手段をよく知悉してをる。旗手 Iago は主人の鐘の胸中の下の如何なる場所が弱く傷つき易い個所かをみつけようとしてまさぐる。N. としては、怪物 Néron にて愈其の本領とする性を發揮せしめようとする。Iago は、おほらかな Othello をして殺人せしむる様にもつてゆく、N. は誰人をも欺かぬ」Iago は皆人に *honest Iago* と称せられて、それで通つておる。Néron を誘惑する Narcisse は自分の興味本位に働きかける。旗

1) Britannicus IV. iii. 1314行

1) Britannicus IV. iii. 1431行

1) Britannicus. V. 1641.1642行

手は、行為の進展するにつれて欺謔ぶりが冴えてくる。面白いことには、此の二人の悪魔的存在は、いづれも己の正反対の正しきもの、聖きもののよさを認識してをることである。Christopher Marlowe の Faustus に於て、最初、Mephistophiles が醜い姿を以て現れる時は、F. は、M. に向ひ、出直して、フランシスコ派の老行者となつて来れという。その通りになつて、次に出現する。

I charge thee to return, and change thy shape;

Thou art too ugly to attend me;

Go, and return an old Fransiscan friar;

That holy shape becomes a devil best.<sup>1)</sup>

訳 貴様に命ずるぞ、かえれ、姿をかえて来い。少々、まず過ぎるぞ、俺様に侍べるには。さあいつた。今度来る時分にや、老人のフランシスコ派の托鉢僧にでもなつてくるさ、そういつたありがたい姿が悪魔にはもつて来いの格好さ。

Iago も、同じ様なことを前述の如くいつておる。聖なるものが、M. にとつても都合がよいらしい。Narcisse にとつても、Iago にとつても、同様にいえる。Narcisse は、Britannicus にとつては有徳な教師に見える。B. の生命のある限りは少なくとも馬脚を露さずにすんだ。Junie は流石に。N. の裏切行為に気がつき、B. に注意を与えるが、一向に之を取り合わない。若し、Britannicus が今も少し理智の力を働かすなら、Narcisse の偽善も欺謔をも察して、Junie の忠告を受け入れたことであろう。この B. の愚直振り、無知振りが奸智の N. の跳梁跋扈を徒に許した結果となつたといえよう。

それは Othello と Desdemona 対 Iago に就いても同じ様なことがいえると思う。O. にしても D. にしても余りにも善良で人を鑑識し得る力に欠けておつたのではないか、たゞ、Iago を honest とのみ盲信せず Iago が、曾て O. の副官となろうとして、武将の拒否にあい、空しく退いたこと等を思い合してみる所の上になつた者としての明識をもつていてもよい筈である。D. にしても、今少し慎しみ深く、武将としての夫人の風格を考慮してもよかつたのではないか。少なくとも、李下に於ては冠を整さず、瓜田には履を納れざる程の心得が必要ではなかつたか。Lear 王の三女 Cordelia も善良ではあるが、余りに頑固過ぎて却て、災を後に招くのと何か知ら共通なものがあると思う。けれども Britannicus にそれ程の知を求めることはもとより無理であり Narcisse の徹底的な悪人振りに憤りを感じるのみである。

次に Othello の三幕三場では Iago の l'art sadique の climax に達したとも云える個処に就いて述べてみたい。

旗手の奸策通り飲酒の結果醜態を演じて失敗した。Othello の副官 Cassio が Desdemona にとりなしを懇願して立ち去る後姿を見送る Iago は

Ho! I like not that<sup>2)</sup>

Othello には意味が分らぬ。Iago は脛に傷もつ者の如く忍び足で出て行くのは、トンと解せませぬ。御身の来られるのをみて直ぐに。

相手には未だ通じない。Iago は、今度は、意味深重な言で打ちこんでゆく。Othello が Desdemona との婚約時代に、Cassio が D. を知つておつたかをきく。まさか、知つておるとは思はなかつたと付け加へる。知つておるところか。何回も二人の間に往来したと武将は答える。

Indeed! Iago は尤もらしくいう。

武将は Indeed! ay, indeed:<sup>3)</sup> と繰り返して、魔術にかゝっていることに気がつかぬ。Iago の言

1) Marlowe<sup>2</sup>, I. iii. 23-26

3) Othello, III. iii. 101

1) Othello, III. iii. 34

葉 honest を武將は、又もや繰り返している。

Iago は更に、

Iago. Men should be what they seem ;

Or those that be not, would they might seem none !<sup>1)</sup>

訳 人間は、見た通りのものでしょうな。そうではない者は、そうでない様に見えたらよいのですよ（そこで、まあ、Cassio だつて、一個の根の善い人間だとは思いますがね。）

Iago の白は、他の個所にもそうであるが、二八才の者がとても言ひそうもない。分別臭いことを吐き、人を食つた様なところがあつても、おかしい程信じ切つておる武將には妙には感ぜられぬ。Iago は武將に対して卑屈な態度をとる。そして、武將の鎧の継目の間より、其の急所を突かむと狙いをつけておる。が、いうことは、真理を穿ち、きく者をして首肯せしめる。Iago はこんな哲理、真理めいたことを吐くのは、何かしら相応しくもない。

不自然さが感ぜられないであろうか。武將に対して演じておる役割は、King Lear に対する Fool の様な感じもする。但し、Lear では Fool は Lear 王の機嫌を直し、忠実に任へるが、Iago は主人を滅びに導く裏切者である。Narcisse は B. に対しては、自然に真実を述べ Lear に対する Fool の役目とも異なるものがある。Iago の吐く言は、詭弁を弄してをるかと思われ。奴隷すらも其の心の中に思つておることを口に出していう義務は無いのに、私の考へておることを申上げることは、御身の為めにも、私の為めにもよいことではありませぬ。旗手の言は、愈々不安、疑惑やるせない気持ちに、武將を突き落す。Othello の心は、妻に対する一点の曇りにでも、疑惑にでも汚れておらなかつた。Othello の描いておる美しい夢を旗手の言は、今や打ち破らむとする。Narcisse の場合には、Néron と利益の方向が一致しておる故に Néron の描く image を破るのではなくて、其の本質的なものを一層助長せしめるのである。Narcisse 自らの image を Néron によつて、実現しようとするのである。之等二人の悪玉の要する努力に就いていえば、Narcisse のそれより Iago の方は強大であろう。併し、両者のもつ影響は如何というに Narcisse の方が大きいといわねばならない。彼は、己の身は滅亡しても、Néron という強大なる悪玉を、二重ロケットの如く発射し出したからである。Iago の悪は、武將とはいへ、一家庭内の悲劇に過ぎぬ。けれども、兩人とも、救の無い世界に入つたことは疑う余地がない。狭き門ならず、広い門に入つた以上、すべての希望を放棄しなければならぬ。Dante は先輩 Virgil の案内で地獄を訪れた時、門にかゝる文字を読んだのである。前述の様な精神状態に突き落された Othello は、今度は、jealousy という一言により shock を受ける。それでも流石に O. は、Desdemona が他の競争者をおいて、己を夫として選んだ明を思い起し、疑惑の中にも、其の証拠がほしいという。武將のそういう言を受け、容易にムキにはならぬ Iago は、軽く受け流して、証拠等と申しませぬ。まあ、奥方にお眼をつけなさる様、嫉妬心も無く、さりとして、心にすきを見せず、Cassio との一緒の奥方をよく御覧遊ばせ。但し、御身のおほらかな、立派な御心持を決して悪くする積りはありませぬ。御身を愛すればこそ。私にとつては、Cassio は立派な友達等という。Julius Caesar を殺した Brutus を Antony は an honourable man と称して、決して、悪口を以て罵つて、ローマ市民に訴へたりはしない。Iago も同じ手続を用いる。大分、御動揺の色が見えますなという旗手は、更に貞婦デズデーモナ様万才、さても御目出度の旦那様も万々才。斯うふざけ切つた Iago は、Othello の人種的な弱点をうまく突いて、其の inferiority complex を痛撃する。斯うして、Othello が、恐れ戦き乍らも、之を強く打ち消して、強いて持ち直したであろうところの此の inferiority complex の觀念に、今更の如く強襲されるまゝになる。一度はムーア人を独り残して退いた旗手は、またもや姿

2) Othello, III. iii. 127-128



を現して、此の問題には、余り立ち入つて御調べなさらぬ様に願います。時間に御まかせなさる様にといい却つて含みをもたせる。此の辺、ムーア人の心理的弱点を巧に突く有様は実に堂に入つておる。次には、明かに Cassio と夫人との関係に邪推を生じさせる。Néron が Junie を己が手は入れようとしても、尙、誰彼に気兼ねして不安そうに尋ねる答に、

Narcisse は、

Quoi donc ! qui vous arrête, Seigneur ? <sup>1)</sup>

訳：何と仰せられます。わが君、誰に御遠慮なさいますか。

斯ういう短い白も、やがて、Néron と共に自分をも、滅びに導くものである。ムーア人に、そろそろ俺の毒の効目もあらわれてきたと Iago は、ほくそ笑むが、武将は未だ決定的には動かされない。最も卑しく、Iago に相応しい露骨な言が吐かれる。更にすかさず Cassio の寝言其の他を捏造して大きな衝動を加える。妻を八つ裂にしてくれようという武将の言を受けては気を鎮ませ給へ、実際この眼でしかと、見たのではないからという Iago の悪玉振り。手巾は更に動かせぬ証撫の様に思われて、武将は血迷うて来る。之程迄にして捏造と欺謾とを以てムーア人を狂乱に駆りたてた旗手は いとも敬虔そうに膝をつき、上の諸君に誓い、主君への忠誠をみそなわしめ給えと祈る。巧に、悪魔の哲理を、理論で述べるばかりか、実際に之を實踐してのけたのである。

尙、Othello の原の話は Cinthio による。沙翁のと異なる点は、次の通りである。Venice の婦人 Disdemona と Moor 人とは、精神的結びで結婚するが、人種的差別と、社会的伝統により災に終つたそれは、Disdemona は、旗手の妻に、Emilia に、人種宗教習慣も異なる男性とは決して Venice の女性たる者、結婚してはならぬと洩らしてしまう。妻の殺害も、ムーア人は旗手と結んで妻のベッドの上の梁を落して遂行する。Cinthio のムーア人には気品が欠けてをる。併し、原話に於ても沙翁の劇に於ても、災の根本的原因は、妻に対する夫の信頼の念の欠如であり、之を旗手が単によび起し、之に働きかけたことである。Othello の妻への信頼の欠如も、自分の inferiority complex から生じたことと思はれる。ソ聯の映画の「オセロ」も、其の様な面が強く出ておる様に思われる併し、此の映画の Iago は沙翁のに比較すれば、それ程下卑ではない。映画の Iago はもつと下品な下司じみた悪玉であつて欲しかつたというのは小生のみ望であらうか。

### 結 び の 言 葉

以上 Narcisse と Iago との性格に就いて述べてみたが、未だ研究すべき余地があると思う。

Iago 自身は、

Demand me nothing: what you know, you know;

From this time forth I never will speak word. <sup>1)</sup>

Othello が何故に己の魂も身体を欺いて滅びに至らしめたかとの問いに答えて、斯う云う。してみると、とりつくしまもなさそうである。やはり、Falstaff と同じ様に沙翁の不可解の人物であらうか。たとえば、不可解としても、云ひ得ることは、彼は、単なる栄達のために悪を行うのではない。他人の困るのをみて拍手して楽しむ Art sadiqueの徒ではあるまいか。してみると、Narcisseの冒頭の白にみられる通り。此の eunuque も亦この線上の者であるだろう。それに兩人とも、相手の心の中に眠つておる性質を誘発し、或はよび起して、又は、内なる声に応じて行動する者である。心の中に眠るものをよび起すものとして Macheth に於ては three witches であり、Hamlet に於ては、父親の ghost であるという<sup>1)</sup>。

1) Britannicus, II. ii. 461行  
1) Othello, V. ii. 303.304

1) A.C. Bradley: Tragedy

尙、之等の英仏の作品は、夫々異なる意味で我々の興味をつなぐ。Othello は、沙翁のものらしく、英国人の気質に訴えるであろうし、Britannicus は夫なりに、仏蘭西のものらしく、仏国民に愛されると思う。我々としては、スタンダールの如くに Shakespeare を賞して Racine をよくいわないということにわならぬ。夫々がもつ美しさがいつまでも我々を魅してゆくのである。

#### 参 考 文 献

- ANTOINE ADAM: Histoire de la Littérature Française au XVII siècle  
A. C. BRADLEY: Shakespearean Tragedy の Othello, Macbeth  
L'ABBÉ J. CALVET; Manuel d'Histoire de la Litt. Française  
COLERIDGE: Essays and Lectures on Shakespeare 中の Othello  
ALBERT GERARD: The Dark Side of Moor, A View of Othello's Mind.  
CONSTANTIN STANISLAVSKI: Othello mises en scène et Commentaire René Lalou  
DOVER WILSON: The New ShakespeareのIntroduction

#### 使 用 テ キ ス ト

- Racine, Molière Classiques Larousse  
Shakespeare, Everyman's Library  
Dante, Oxford Edition of Standard Authors  
Marlowe Doctor Faustus Macmillan's Eng. Classics  
Great Books of the Western World 中の Tacitus の Annals  
Othello 研究社版 (市河三喜氏註)